

実践報告

生徒指導の3機能を活用した短時間グループアプローチの実践

—— 教師アンケートから見る「しっぴータイム」の成果と課題 ——

曾 山 和 彦, 梶 浦 寿 男*

Practice of Shorttime Group Approach that based on the viewpoint of the Guidance in junior high school

Kazuhiko Soyama, Toshio Kajiura

1. 生徒指導の3機能とは

教師の使命は子どもを「教育」することである。そして、その教育の目的は、教育基本法第1条に、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と明示されている。では、条文の文頭に記された「人格」とは何であろうか。辞書を紐解くと「独立した個人としての人間性。人の性格・品格」（明鏡国語辞典）とあるが、第1筆者が最も納得し、共感しているのは、人格の構造を「領域」と「資質」との関係で表した坂本昇一氏の考え方である。以下、引用・紹介する（坂本、1998 P13）。

	<領域>		<資質>
人格の構造	・認識の領域	→	知識理解
	・神経・筋肉の領域	→	手技的技能
	・感情の領域	→	意欲、関心

人格を上記のように捉えたとき、教師の使命は明確になる。すなわち、教師は、各教科の指導や特別活動、総合的な学習の時間を通して、子どもの「知識理解」「手技的技能」「意欲、関心」に働きかけ、それらを育むことが「課せられた重大な任務」である。それでは、生徒指導は、人格の3領域のどの部分に働きかけるのであろうか。この問いに対する坂本氏の考えは次の通りである（坂本、1998 P68）。

* かじうら としお 愛知県あま市立七宝中学校校長

生徒指導は、人格形成を目指す教育の中で、「感情的領域」にアプローチする。その「感情的領域」の主な資質は「意欲」である。それゆえ、生徒指導は、意欲を引き出したり、意欲を育てることに、主として作用する。

子どもの意欲づくりということでは、各教科等の指導等の中でも、それは当然行われる。それに対して、生徒指導で行う意欲づくりは、特定の指導内容や指導領域に限定されない、全ての教育活動において行われるものである。この「全てに当てはまる共通の意欲づくり」に対し、生徒指導はどんな働きをするのか。その働きを「生徒指導の機能」と呼んでいる（坂本、1998 P69）。そして、その機能には次の3つがあり、それが「生徒指導の3機能」である。

- ①子どもに自己決定の場を用意すること
- ②子どもに自己存在感を与えること
- ③子どもとの共感的関係を基盤にすること

この3機能を各教科、特別活動など教育課程の領域全てに、また、清掃活動、給食等、学校の行う全ての教育活動に具体的な方法として機能させることで、生徒指導の究極目標である自己指導能力の育成につながる。

2. 七宝中「しっぴータイム」と生徒指導の3機能

「しっぴータイム」とは、第1筆者が提唱する、児童生徒の「かわりの力（＝ソーシャルスキル&自尊感情）」育成をねらった短時間グループアプローチ（＝ソーシャルスキル・トレーニングと構成的グループ・エンカウターの理論・技法を統合した週1回10分間で行う活動）のことである（曾山、2016）。「しっぴー」は、「七宝中」の生徒皆が「ハッピー」になることを願い、ネーミングされたという。短時間グループ

アプローチには、展開の「型」を設定している（Fig. 1）。その理由は、「指導者（教師）が交替しても実施できるように」「他の学級の生徒同士が合体してもできるように」「展開の変化に弱さのある『気になる子』も取り組みやすいように」という3点である。

七宝中が、しっぴータイムを導入したのは平成27（2015）年度である。その数年前から、

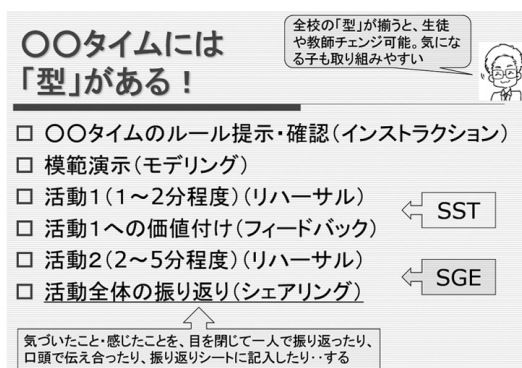


Fig.1 「〇〇タイム」の型

学校内には「俺なんてどうなってもいいんだ」等の生徒の声が多く聞かれるようになったことで、教師間で生徒の自尊感情の低下が危惧され、「生徒に寄り添う温かな言葉かけ」の必要性が議論され始めた。同時期の平成26（2014）年10月、愛知県刈谷市立依佐美中学校で開催された公開研究会に参加した当時の校長が、依佐美中の短時間グループアプローチである「よさっぱりタイム」の実際、及びその効果に触れ、「この活動こそ七宝中に必要」という思いを強くしたことが、翌年度からの全校一斉導入へとつながった（七宝中、2022）。第1筆者が七宝中へのスーパーバイザー（指導助言者）としてかわりを始めたのは、導入から2年目、平成28（2016）年度からである。年2回の校内研修の機会に、全学級のしっぴータイム参観、及び、教員研修を重ね、共通理解に基づく校内指導体制が整ったのは平成30（2018）年度という実感がある。つまり、導入から3年間、試行錯誤の実践を経て、4年目から「全校一枚岩」のしっぴータイムが完成したと考えられる。このしっぴータイムを、生徒指導の3機能に照らし、具体的に整理した表がTable1である。

Table1. 生徒指導の3機能としっぴータイムの照合一覧

3 機能	しっぴータイムにおける教師の働きかけ
自己決定	・「アドジャン」「1分間スピーチ等の演習で、自分の答え・考えを定めさせる。 ・「振り返り」で、自分の気づき等を確認、定めさせる。
自己存在感	・相手の話を聴くときは「頷いて聴く」ように声をかける。 ・「1分間スピーチ」を聴き終えたら、小さく拍手するように声をかける。 ・活動中、さらに「価値付け（褒め・勇気づけ・認め）」をする。
共感的関係	・楽しい雰囲気の中で活動が展開されるように表情、口調等に留意する。 ・例示の際など、「自己開示」を心がける。 ・机間指導の際、生徒の状態に応じ、声をかける。 ・生徒同士の関係づくりが促進されるよう、定期的にペア等を替える。 ・教師との関係づくりが促進されるよう、定期的に指導者を替える。

3. しっぴータイムの成果と課題

導入から5年を経た令和元（2019）年度末、実践の成果と課題を整理するため、教師対象のアンケート調査を実施した。質問項目は次の通りである。

- (1) 生徒の変容
 - ・自尊感情の視点 ・ソーシャルスキルの視点 ・全体的な視点
- (2) 教師の変容
- (3) 不登校予防
- (4) 「主体的・対話的・深い学び」への寄与
- (5) 課題
- (6) よりよい方法

上記項目に沿い、以下、しっぴータイムの成果と課題を教師の声から整理する。なお、アンダーラインを引いた箇所は、結果、及び考察中に引用している記述である。

(1) 生徒の変容

①自尊感情の視点

2年次不登校だった生徒が3年次半ばのしっぴータイムの中で笑顔で話している姿が見られ印象的だった。環境が変わった直後にしっぴーを行うことによる自尊感情の高まりの一例だと感じる／しっぴータイムをやっているときの生徒の表情はとても良い。楽しみながら自分のことを話したり、話を聴いたりする姿を見る限りでは自尊感情は上がっていると思う／生徒アンケートにはあまり変化はないが、傾いて話を聴いてもらっていたときの生徒の笑顔が自尊感情の向上を物語っていると思う／生徒アンケートに「話しているときに傾いてくれてとても話しやすかった。嬉しい」などの記述をよく目にし、そういったことが自尊感情につながると強く思った／話を聴いてもらえることで、少しずつ「自分が認められていると感じている」と言う生徒が多かった／新3年はアンケートでも「自分には良いところがあると感じるか」の質問でそう思う、どちらかというと思うとの回答が増えている／話を聴いてもらうことや、あまりしゃべらないクラスメイトと話をすることは楽しいなどの意見が多かった／相手の話を聴くことで、意外な面を知ることができたという声が多く聞かれるようになった。自分のことを話すことに抵抗がなくなっている／人とかかわりが苦手な生徒も、回を重ねるに従って表情が良くなっていった／「いいとこ四面鏡」で自分の良いところを周囲の生徒から言ってもらえることで自分の良さを再確認できるようであった

②ソーシャルスキルの視点

人の話を聴く態度が良い。話し手の方を見ている／傾く、笑顔などの反応がある。話し手が話しやすくなる／教師の顔や目を見ながら話が聴けるようになった／生徒同士だけでなく教師の話を聴く中でも傾く姿が見られるようになってきた／切り替えができるようになった。素早く話が聴ける状態を作れるようになった。顔を上げ話を聴ける人数が増えた／挨拶は身に付いている。班で話をするとき「しっぴー」と言われなくても自然と挨拶ができていく／授業における話し合い活動がスムーズに進み、かつ積極的に行うようにできた／様々な場面で生徒が話す人を見て、傾きながら話を聴くことができており、かかわりの力がついてきているように思う／挨拶、傾き、見渡して話す、指示を聴く、というルールを日常生活でも意識して行っていると感じる。特に聴く姿勢がとても良い／昨年度は中1生を見ていたが、対話の基本が身につけていった気がする。ポイントを繰り返すことで、話し合い活動を嫌がらずに行うことができ、全員が参加する姿が見られる／フリートークになるとしゃべりすぎる生徒が出て、班でバランスのとれたトークがうまくできない点が見られる／傾きは少しずつできる生徒が増えているように感じる。しかし、スキルは身に付いてきている、休み時間に孤立してしまう生徒が少なくない。しっぴートーク以外の場面でもスキルやかかわりを教えていく必要がある

③全体的な視点

しっぴータイムで打ち上げた花火を、しっぴートークでリレーすることは生徒のソーシャルスキルを一般化させるために必要である。しかしまだあまり、しっぴーと名前のつかない場面で使えるほどのスキルになっていない。常に2本のアンテナを張って生徒に声をかけていく必要を感じる／朝礼など全体が集まるまでの聴く姿勢がしっかり身に付いてきている／誰とでも分け隔てなく話ができているようになったと、特に3年生を受け持った時に感じた。1年生からしっぴーに取り組んだ結果だと思う／話し合い活動で「話す」ということに抵抗がなくなった。話し合い活動が素早くできる／話し合いに対する抵抗感がなくなった／男女のペア活動がやりやすくなったように思う／授業や学級活動での意見交換が活発になった／年度後半に行くにつれて笑顔が増える気がする／全体的な人間関係が築かれている様子がうかがえる／生徒たちの成長のためにとても効果的だと思う

(2) 教師の変容

アイメッセージで生徒への思いを伝える教師が増加した／職員会議や講話で領きながら話を聴く教師も増えていると思う／自分自身も話をする中で意識をすることが増えてきた／私自身生徒への働きかけが大きく変わった。もちろん完全にはうまくいかず反省の毎日だが、生徒とのかかわり方がより効果的にできることが増えたような気がする／初任者として七宝中に来た自分自身としては、進め方に関して他の先生と話し合うことが勉強になった。生徒ともかかわりやすくなった／多くを語らず、じっくり聴く指導スタイルが身に付いてきている／型を揃えることで教師の中でも一体感ができた／本校では、年度初めにしっぴーの研修をしっぴー主任の講師で行っている。転任してきた先生方にしっぴーを体験してもらう中で、転動の緊張感から開放され、古参の先生方との心の垣根が一気に取り払われていくように感じる／授業の中でグループワークを行う時、スムーズに活動ができる／学年主任、副主任が、しっぴータイムに触れることが少なかったため、教師チェンジを取り入れて、多くの教師で生徒にかかわり褒め、叱ることができるようにしていきたい／授業（指導）の場面で、積極的に話し合い活動を取り入れることができるようになってきた／学校で統一して一つのことを行うことで連携し、一致団結して指導を行うことを自分自身心がけていく意識をもつことができた／これまで教師側から押し付けてきたものを、生徒同士の話し合いで決定させるようになった／アイメッセージが増えた。静かになるまで待てるようになった／授業や部活の中でも話し合い活動を行いやすくなり、相手が何を考えているのか、知る機会を増やすことができ、成長した姿は見られる／生徒間の人間関係ができていくことで、教師から生徒へのアプローチのツールがより多くなる。学級経営もよりやりやすくなる／生徒の様子を見ながら活動を進めることができるようになった。生徒にかける言葉が変わった

(3) 不登校予防

不登校予防にはなるが、不登校になってしまった生徒は物理的にしっぴーの効果を楽しめないで、年度初め、できるだけ早い段階でしっぴーをスタートさせたい／学校不応がゼロになってほしいと強く思うが、なかなかゼロにはならない。プログラムの実施が新たな一人を出さないことには有効。しかし、不登校になってしまうとプログラムが実施できず悩むところ／自尊心が高まることは学校不応の予防改善につながると感じる／年度始めなど、新たな1年を始めるタイミングでは、不登校気味の生徒も登校しやすくなる。そのような時期に、しっぴートークを計画的に取り入れると効果がより見られるのではないと思う。一度不登校気味になったり、不登校になったりしてしまうと、しっぴートークそのものに参加する機会を失い、その効果を観察する機会自体を教師もつかめなくなってしまう／不登校予防につながっているという実感はないが、相互理解が進んでいることで人間関係が円滑になり、いじめの予防にはつながっているように思う／コミュニケーションの取り方に問題がある生徒も少しずつ話し方やかかわり方を学んでいる。すべてうまくいっているわけではない。教師の見えていないところで悪口を言うことが改善されていない／令和元年度の1年生で、不登校予防の一助となっていたと感じた。小中連携の成果であると考え／人とかかわりをもてない生徒もいる。しかし、不応予備軍のような子には、居場所ができる1つのきっかけになる可能性はある／周りの人と話をするのがより増えたことで、生徒同士で気づき、相談することが増えているように感じる

	1年生	2年生	3年生	合計
平成25年度	12	8	15	35
平成26年度	5	9	6	20
平成27年度（しゅびータイム開始）	7	3	8	18
平成28年度	2	16	1	19
平成29年度	6	7	14	27
平成30年度	8	15	6	29
令和元年度	3	10	13	26
令和2年度	3	4	9	16
令和3年度	5	6	11	22
令和4年度（7月現在）	3	3	4	10

全学年不登校数

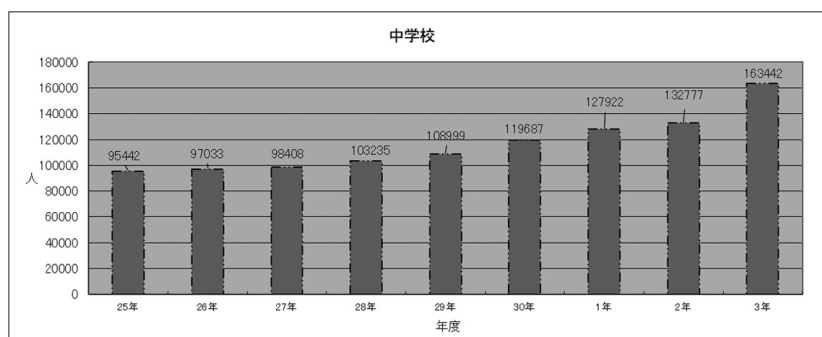
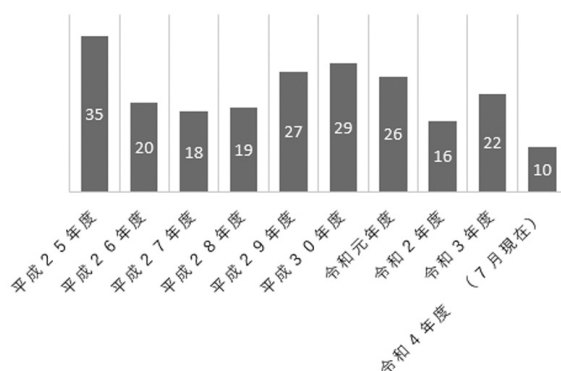


Fig.2 全国不登校中学生生徒数（文部科学省 .2022）

なお、上記の表、及びグラフは、この10年間の七宝中在籍生徒の不登校数である。

Fig.2「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省、2022）によれば、小中学校不登校児童生徒数は、平成25年度から令和3年度にかけて「9年連続増加」を示している。七宝中は年度によるバラつきはあるものの「連続増加」を示していない。また、教師自由記述（アンダーライン部）において、「不登校予防につながっている実感はない」という声も一部見られるが、「不登校予防にはなる」「プログラムの実施が新たな一人を出さないことには有効」「学校不適応の予防改善につながると感じる」「令和元年度の1年生で、不登校予防の一助となっていたと感じた」「不適応予備軍のような子には、居

場所ができる1つのきっかけになる可能性はある」等、複数の肯定的な声も見られる。このように、数値及び、教師自由記述の結果から、しっぴータイムには不登校予防の一定効果が示唆されたのではないかと考えられる。

(4)「主体的・対話的・深い学び」への寄与について

グループ活動に慣れ、机の移動、話題への取り組みがスピーディーに行えるようになったことで、短時間で実施でき、活動が取り入れやすくなった／話し合いにスムーズに入ることができているので、効果はあると感じる／授業での話し合い活動を活発に行えるようになった／しっぴートークを通して対話的であり、様々な角度から、立場の違う意見をもらうことで深い学びにつながると思う／話し合い、グループ学習の仕組みが全校で定着しているので、どの学年でも抵抗なく行えることがとても助かっている／4人組の話し合い活動で活発に意見が出るので、しっぴータイムの効果だと感じる／深い学びまではわからないが、話し合い活動は行える。話し合い活動を通して意見をまとめ、発表するまではできる／対話することに抵抗を感じる生徒は少ない。そのため授業者は進めやすい／正しく新学習指導要領に沿った取り組みと感じる／クラス全員が考えることができる／各教科指導においては、班やグループでの話し合い活動をスムーズに行えるようになっている／話し合いに対する抵抗がなくなっているのも、一つの課題を与えると、話し合いをスムーズに行うことができる／生徒同士が話し合うことに抵抗がなくなった／男女、友だちでないクラスメイトと話し合う機会を繰り返し行ってきたことで、話し合う形の確立による安心感や経験を得ることができ、グループでの話し合いの最初の一言がすぐに出るようになった／授業での話し合いへの切り替えは早いと感じる。本校では「しっぴートーク」と呼んでいるが、「しっぴー」の一言で、話し合いのスイッチが入る感じがする。ここでの話し合いは討論的な相手を打ち負かす話し合いではなく、あくまで建設的な温かい雰囲気で行っていると感じる／部活動の中でもしっぴートークを取り入れた、相談・決定・問題解決の場を設けている。選手が主体的に練習に取り組むようになったと思う

(5) 課題

しっぴータイムを10分間で行うと、フリートークやシェアリングに十分な時間を取ることができない。基本ベースを15分通した方が効果が出そうに思える。15分にするデメリットもあるとは思いますが…／しっぴートーク等の〇〇トークの立ち位置が難しい／しっぴータイムで学んだ、身に付けた、ソーシャルスキルを生かした授業におけるペアグループ活動だと思うが、具体的に何をすればよいのか、どこまでのことを求めるのがはっきりしない。技能教科の場合は毎時間取り入れるのは難しく感じる。ある程度の知識や技能が身についたときにやらなければ何も話すことができない／生徒にもよるが、普段の生活で人とかかわる必要を感じていない（考えていない）生徒が少し前向きになれない点／お題の答えを考えるのに時間がかかり、なかなかフリートークの時間が長くとれない／飽きさせないように、また、活動に意味をもたせるために、教師からの声かけや働きかけなど工夫も必要だと思う／もう少し話したいと思うところで終わるのが理想だと思う。しっぴータイムが終わった後でも、その話題で休み時間を過ごす生徒はほとんどなく、しっぴーで芽生えた相手への興味はしっぴー終了とともに消えてしまう感がある。そこまで興味が持続する必要はないのか、初対面の人とかかわるためのスキルの一つとして割り切って考えていくのか、自分の中でいまひとつ整理がついていない／ソーシャルスキルが身についているのか、続けていることで身につけているように見えているのか、このコロナ休業明けのしっぴータイムで生徒たちがどんな姿を見せてくるのかを見たい。ここで進めにくさを感じさせるようなことがあるなら、続けないと効果が維持できないと判断できると思う／決められたお題の中での話はできるが、フリートークになると会話量が減ってしまうことがある／学級内の人間関係が複雑だと教師チェンジはしづらい／少人数での話し合いはできるようになってきているが、全体での話し合いとなると、挙手、発言がなくなってしまふ／しっぴートークで答えにたどり着いたとしても、一人になったときにそれを再現できない生徒も多くいて、対話的な学びを最後どうやって個人の中に定着させていくのか、授業の中で、グループ学習の機会を増やしているが、中にはグループの生徒に教師に認められた裏づけがない状態で積極的に話し合いにかかわれなかったり、グループの仲間より教師に認められたい欲求が強い生

徒もいて、そういった生徒をいかに目の前の仲間を信じたり大切に思ったりする心をつくっていくのも課題と感じている／他校ではどれぐらい型を揃えてやっているのか、うまくやれているところは何かを知りたい／学級経営がうまくいってれば効果があると思う。しかし、人間関係がうまくいっていなかったり、学級内のルールが崩れていたりすると、逆効果になることもあるように感じる

(6) よりよい方法

授業の中で実践していくための実践例がまだ少なく、どのように取り組んでいくに悩むことがある。少しずつ実践を重ね、レパートリーを増やし共有していく／型の統一、先生チェンジ、しっぴー主任による現職教育／全体が同じ歩調で取り組む／全校で行う上で足並みを揃えること／全校・全職員が一枚岩となって取り組むこと。これに尽きる。また、小中連携も大切／まだ実践はできていないが、教師のローテーションなどを行い、学年の実態把握をより早く行う。さらなる統一や学校内の勉強会等／どの学年も同じルールでやっているのでも部活動などでも利用できる。学年によってレベルを上げていく／最後の生徒自身での振り返りにも工夫をする／継続は力なり、変にオリジナリティーを入れて型を崩す教員に型の必要性を語り続ける／校内でしっぴー部会を作成して、しっぴータイムの確立と普及のため話し合いを設けているので、継続する／AMA ティーチャーズカレッジなど、校外の研修会に講師として出向き、しっぴーの実践・良さを伝えていく

4. 考察；生徒指導の3機能を活用した「しっぴータイム」の意義と課題

生徒指導の3機能、すなわち「子どもに自己決定の場を用意すること」「子どもに自己存在感を与えること」「子どもとの共感的関係を基盤にすること」を活用した「しっぴータイム」の意義と課題について、先行研究の知見も参考にしながら、以下、考察する。

(1) しっぴータイムの意義

①生徒がかかわりを楽しめる活動である

第1筆者が提唱する短時間グループアプローチに最も早く取り組んだ学校は、愛知県刈谷市立依佐美中学校である。依佐美中「よさっぴタイム」の効果研究(曾山, 2015)を行った際、教師の声として、「1年生の頃、生徒指導上の諸問題が多発していた生徒が3年生になった頃、一部の生徒を除き、全体として落ち着いた。その一部の生徒ですら、よさっぴタイムにはあふれんばかりの笑顔で参加をしていた」「よさっぴタイムは生徒に馴染み、本当に男女の仲がよく、温かな雰囲気での話し合いができるようになった」「よさっぴタイムを行ってから学級の雰囲気がとても和やかになった」等が挙げられていた。本研究の「しっぴータイム」も、「笑顔で話している姿」「表情はとても良い」「表情が良くなっていった」等の記述から、「よさっぴタイム」同様、生徒が十分にクラスメイトとのかかわりを楽しめているのではないかと考えられる。

②生徒のかかわりの力（自尊感情，ソーシャルスキル）が育つ活動である

「よさっぱりタイム」の効果研究では教師の声として、「友だちの意見を聴く，自分の意見を友だちに認めてもらえる，友だちに自分のことを知ってもらうことを経験し，自尊感情の高まりにつながった」「よさっぱりタイムのおかげで男女のペアワークやグループ活動，会話にまったく抵抗がなく，教科指導がとてもやりやすい。人と話すことに抵抗がないのは素晴らしい」等が挙げられていた。本研究の「しっぴータイム」でも，「生徒同士だけでなく教師の話聴く中でも頷く姿が見られるようになってきた」「特に聴く姿勢がとても良い」「聴く姿勢がしっかり身に付いてきている」「『話す』ということに抵抗がなくなった」「全体的な人間関係が築かれている様子がうかがえる」「生徒たちの成長のためにとても効果的」等の記述がある。これらのことから，かかわりの力の中でも，特に，ソーシャルスキルが育つことが示唆されたと考えられる。

③「主体的・対話的」な学びに寄与する活動である

「よさっぱりタイム」の効果研究では教師の声として，「日々の授業に生き生きと取り組み，思いを伝え合う姿は，継続して取り組んできたよさっぱりタイムの賜物」「かかわりの中での笑顔，テーマに沿って話を続ける姿は本物」「授業中の話し合いに自然な形で取り組める」等が挙げられていた。本研究の「しっぴータイム」でも，「話題への取り組みがスピーディーに行えるようになった」「話し合いにスムーズに入ることができている」「話し合い活動を活発に行えるようになった」「様々な角度から，立場の違う意見をもらうことで深い学びにつながる」「話し合い活動で活発に意見が出る」「対話することに抵抗を感じる生徒は少ない」「部活動の中でもしっぴートークを取り入れた，相談・決定・問題解決の場を設けている。選手が主体的に練習に取り組むようになった」等の記述がある。これらのことから，「主体的；自分自身の意思や判断に基づいて行動する様」な学び，及び，クラスメイトとの「対話的」な学びを展開するために，十分な土壌づくりとして寄与しているのではないかと考えられる。なお，「深い」学びに関しては，アクティブラーニングの具体的観点としてアンケート項目に入れたものではあるが，「主体的・対話的」な学びと異なり，教師の観察による把握が難しい。それ故，本考察で言及することを控えることとしたい。

④教師としての力量アップにつながる活動である

「よさっぱりタイム」の効果研究では教師の声として，「自身が生徒と接する際の引き出しが一つ増えた」「生徒のみならず，教師集団も容容してきたことに喜びを感じる」「生徒の成長を感じるだけでなく，自分自身，教師として生徒の意見を受け入れることの大切さを学んだ」等が挙げられていた。本研究の「しっぴータイム」でも，「思いを伝える教師が増加した」「話を聴く教師も増えている」「生徒への働きかけが大きく変わった」「じっくり聴く指導スタイルが身に付いてきている」「話し合い活動を取り入れることができるようになってきた」「静かになる

まで待てるようになった」「生徒にける言葉が変わった」等の記述がある。「よさっぴタイム」も「しっぴータイム」も Fig. 1 に示した「型」によって展開される短時間グループアプローチである。全校共通の「型」があることで互いの生徒への働きかけ等を比較しやすく、その結果、教師としての力量アップにつながっているのではないかと考えられる。

(2)「しっぴータイム」の課題

第2筆者は「しっぴータイム」の課題として、次の2点を指摘している。

①「しっぴータイム」の実践を学校生活の様々な活動に活かすこと

「しっぴータイム」の継続実践により、各教科等の授業における話し合い活動の基礎は築かれてきている。今後は、「教師と生徒とのかかわり」「異学年生徒とのかかわり」等にどのように広げていくかという検討が必要である。

②マンネリ化打破に向けた工夫をすること

「しっぴータイム」で行う基本演習は、「アドジャン」「二者択一」等の数種類に留めている。教師が毎週のように演習を代えて実践する「しっぴータイム」では、教師自身に負担感が生じ、全校共通の実践が難しくなるからである。しかしながら、基本演習の繰り返しは、どうしてもマンネリ化を招き、生徒が飽きやすくなる。それ故、今後は、「教師がチェンジして実施する」「学年・学級の生徒をチェンジして実施する」等の工夫を検討したい。

*「しっぴータイム」は、令和2(2020)年度以降のコロナ禍においても実践を継続し、令和4(2022)年度で8年目を迎えた。かかわり豊かな生徒が育ち、各地の範となるほど「幸せな学校」が生まれている。次の機会にさらなる「しっぴータイム」の成果を報告したい。

<参考・引用文献>

- ・梶浦寿男 2020 自他を大切に、よりよい人間関係を築くことができる生徒の育成～しっぴータイムを通して～ 日本教育公務員弘済会報告書
- ・文部科学省 2022 「令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」
- ・坂本昇一 1998 子どもの心を癒やし育てる 小学館
- ・七宝中学校 2022 令和4年度しっぴータイム研究紀要
- ・曾山和彦 2015 中学生を対象とした短時間グループアプローチの実践とその効果 名城大学教職センター紀要第12号
- ・曾山和彦 2016 学校と創った教室でできる関係づくりー「王道」ステップワン・ツー・スリーⅡ 文溪堂